



あがこん通信

第21号



自由民主党
福岡県議会議員

あがた 善彦

観光戦略を考える



今年の一月、市議会議員選挙が行われました。市政報告会では「スペースワールドが今年いっぱいまで営業を終わるそうですね。跡地の活用は、どう考えていますか？」こんな質問が複数の会場で聴こえてきました。

さいました。その後、イオングループと協力し再稼働に向けて検討を重ねることが発表されています。

これからの北九州の大切な観光資源として生まれ変わるように期待したいと思います。そこで、この機会に、スペースワールド跡地の活用に対する私の意見と、福岡県の観光戦略の概要についてご紹介いたしますので、皆様の市政、県政を考える一助にさせていただきたいと思っております。



モノ申す！ その公平って 誰のため？

一月の市議選後の中だるみを自戒していた矢先、

仰天する事実を知った。衆院選の「一票の格差」は正のための区割りである。総務省のデータ調べてみると、同じ町内でも△丁目○番地はA区、それ以外の番地はB区にわかには信じられない複雑な境界線。これまでと選挙区が変わり、支持者の大半を失うばかりか、自分自身にも投票できない候補がいると聞いた。先の衆院選で県を跨ぐ合区が実施された際も、国の代表を選ぶのだから問題ないとされたが、本当にそうか。

かつて勤務していた東京では最寄りの地下鉄駅まで徒歩五分。その間で生活に必要な物はほぼ調達できた。駅では待たずに次の電車がやって来る。今は一番近いコンビニまで徒歩十分、公共交通機関は

一時間に一本。高齢者も自分で運転せざるを得ない。東京の家賃は高い、渋滞は激しい、どこでも行列。だが大都会の利便は十分に享受していた。

都会と田舎では産業構造もライフスタイルも違う。人口と所得は税収に直結し、田舎では住民の涙ぐましいほどの自助努力が地域を支える形。都会ではお宝の土地も、遊休地の管理コストが苦しい財政を更に圧迫する。

そもそも一票の重みを「頭割り」で論ずるのは正しいのだろうか？だとすれば都会の議員は田舎の議員を駆逐し続け、田舎の声はますます国政に届かない。お隣は従来通りの投票所だが、私はこれまで行ったこともない隣の投票所に、それでいいか、誰が公平を感じられるのか？

出生率や移動といった人口動態により刻々と変化し、そのたび「違憲だ！」の声に右往左往する「有権

者数」ではなく、いつそのこと「選挙区は自治体の境界に準拠、その面積に比例して議員数を決定」とするのは極論だろうか。

民主主義のもと、有権者は自らの意思によって投票する自由とともに、候補者を育て、支援する自由を有している。状況により変動し、人と地域のつながりが切り捨てられる区割りでは、それが阻害される。このあたりでもう一度道州制に光を当てる必要がありそうだ。

我々にとって本当の公平とは、できるだけ多くの人が疑問を感じず、納得できる事のように思う。法を最優先するあまり、目の前にある現実から遠ざかるありさまは、どこか改憲論議にも似ている。

「モノ申す」はあがこん読者の私見に基づくエッセイです。Y

